

明治の初期に於ける翻案劇二つ

文化文政期に於て絢爛と咲いた江戸文學の華も、浦賀の沖へ黒船のもたらした暗い影の爲にひとたまりもなく萎えてしまつた。

王政復古、維新の革命が成つて新らしい光が國民の上に射して來た。そして強烈な色彩を帯びた歐米の文化が潮のやうに流れ込んで來た。福澤諭吉の學問のすゝめが出たのが明治五年である。中村正直の西國立志編が、これは一年早く明治四年の七月刊行されてゐる。これらに次いで民約譯解、天賦人權論、と盛に彼地の思想風俗が傳へられた。

斯うして文學方面も當然動き出さなければならなかつた。即ち明治十二年に出された織田純一郎の花柳春話が小説の翻譯では最初のものとしてゐる。爾來、鳴鶴の擊思談、逍遙の慨世士傳、直彦の春鶯囀。これらは今から考へれば生硬極まるものではあつたけれども、兎も角も新らしい匂ひと色彩とが移入されたのである。

詩に於ては明治十五年に外山正一、矢田部良一、井上哲次郎等に依つて新體詩抄が作られ、テニス、ロングフェロー、キングスレー、シエクスピアなどが紹介された。最後に戯曲で、明治十六年坪内逍遙の該撤奇談、即ちシエクスピアのシーザーを淨瑠璃風に翻譯したものである。

さてこゝに紹介しようとするのは、これらに先立つて明治六年の一月に……尤もこれは翻案ではあるが……セルフヘルプの一部を採つた、即ちこの前々年に出てゐる西國立志編の一篇を翻案した劇である。それも當時としてはエキゾティックな色彩を排けて黴の匂ひ漆の匂ひの中に立籠らうとしたであらう如く考へられるこの古都、京都の七書肆の合同出版であることも面白い。

以下立志編と對照し乍らこの翻案を紹介して行つて見よう。

一、西國立志編
卷之貳

其紛色陶器交易

明治五年十一月免許
六年一月出版

表題でも窺はれるやうに、これは陶工の苦心談である。本朝にも工人の苦心談、殊に陶工の苦心談は多い。小學讀本に採られてゐる陶工柿右衛門を始めとして、九谷の才次郎、瀬戸の民吉など陶磁器の名産地には殆んど何かの苦心談（同一種子のものも随分多いらしいが）が傳はつてゐない處はないと言つてよい位である。これら本朝の苦心談と對稱して見ても面白いと思ふが今はその暇がない。



なほ皮肉なのはこの書の體裁などにも當時、即ち激しい過渡期の中にあつた當時の時代そのものが如實に象徴されてゐることである。先づ著者の自序に

箱根知らずの東京言とは洒落しやれの内での金言なれど横濱さへも繪で見たばかり、出来ぬ乍らも人真似まねにうやうやしくも懷中時計セコンド覗けども更に分りかね街の人に何字とぎを問ひ机の船に打ち乗りて學ぶ書物の萬國廻り……………

懷中時計と鎖とで模様風に枠を取つた中にこの自序が刷られてゐる。

……………妻はあきれて諫言いさかひの自害、傍に泣きゐる吾兒わがこより爺おやか心は百倍の言はぬ色なる山振ぶさのまじの花も散實も末々に陶器の色と諸共に登る其名は巴は

律西が和言譚

神武紀元二千五百三十三年西一月開板
西洋一千八百七十三年

佐藤富三郎

殊に目立つのは第三丁裏と第四丁表とのコントラストである。三丁表は青と黄との薄い色刷りで上部に SELF-HELD などと入れて中央には洋風のテーブル、その上にはこれも洋風の數個の玻璃の器が載つてゐる。さてこれに對した四丁の表はと言ふとこれは又題字落款と言ふ體裁なのである(寫眞参照)全部で四幕になつてゐる。

第一幕 巴律西住所の體

造り物三間の高貳重にして、正面西洋塗りの壁附が上の方ガラス張りの襖、家體下の方石組の外國塀…略…門口の玻璃下畫の商社巴律西と蘭文字に印せしホラフ立在り。右家體の真中にランプ釣り、其前に此家の妻琴靈夫、法蘭西國の女の拵へにて前にタアフル直しイスにかゝり…略…すべて法蘭西國、設因的士巴律西住所の體、淨るりにて幕ひらく

淨るり「性は善なりといへども學ばざるときは道にそむくとかや陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り…略…こゝに法蘭西一千五百餘年路易十二世の御世代にして設因的士に住居なす巴律西は貧苦にせまりて貯へも盡きしその日のたつき事妻はそれぞと燈火のかげに仕事ぞくりかへし、

…略…鐘の音に琴靈夫思入宜しくあつて

琴一今うつ鐘はアリヤ學校の七字の告つひか本ほんに仕事に追はるゝ時は晝夜の時も夢うつゝ…略…
つゝといへばこちの人巴律西どの人にすぐれし職人なりしがいつぞや國の博覽會のその時に意いちや太利
の國より渡つたる名器とやらを見て戻り我國にても其色を出さんとして家の業をうち捨て素焼の茶
碗を集めてより竈を築いての心魂こらし 始めの程は少々の貯へ金も在しかど今ではたつきも自由
ならずこの藥種屋かしこの薪木屋なくて叶はぬ麵包屋さへ皆それだけに借りまかなひ詮方つきて
兎や角もその日の煙も立かねて女子仕事の手ひとつで五日十日の晝の賃が壹つに寄せて一日の麵麩
の價に成り兼ねてひもじい目をいたせしと夫に言へばあのごとく竈のもとにて狂人同前 たとへ夫
婦の者は土を食つてなりとその目を送らうが可愛そなたは何にもしらぬ西律子今にも家へ戻つたな
らせがむであらうそれも道理か麵麩と言つては此間仕事の價でかふた儘それよりしては街ちまたの草花で
養ひしがほんに因果な身の上じやナア
と、こゝへ藥種屋の閑蘇が掛乞ひに来る。

困「いやかまふて下さるな何ぼう日本風で茶など汲んで持込んでも今日計は申ま升す これお内儀い
つも乍ら巴律西殿は留る主すじやゝゝでは通しませぬいつぞやより此裏へ竈を築て何やらごてゝした
ことしてゐらるゝと聞きましたサア繪の具から藥種かんごの算用ざんよう 今してもらひ升うゝ

と型に依つての強談判である。とゞ

琴「モシ閑蘇様こゝに玻璃の晝が仕さしてまだ仕事の手放れぬのが是丈ござりまするどうで借財の價には足りませんまいけれど今日の所はこれで了簡被成て下さりませ又明日にでも成ましたことなればどふなりとも仕やうもやうもござりませぬ 今日親子の者が食ふ物さへござりませぬ仕儀なれば今日の所は是でお歸り被下て下さりませモシお慈悲でござります

と優しく涙を流しての妻女の頼みに閑蘇も遂

閑「成程ナこなさんのように事をわけての頼みと言ひ殊にはその貞節なおまへの心にめで二三日はまつて上げ升う

と差し出された玻璃の器も押し返して歸つて行く、琴靈夫獨りとなつて、歸りの遅い吾子を待つ臺詞、こなし、で

淨「子を思ふ身は親心いづくも同じかはらぬ里山路を越えて親鳥をしとうてこゝに呼ぶ子鳥我家へいそぐ西律子鳥竿かたげ立歸る

母から歸りの遅かつたことを問はれて

西「アイけふは學校の休日ゆへとやかうと思ふ内夕べ寢てゐたときおまへのいはしやつたには翌

日になつたらわたしやとくさんに上げる麵包がないといわしやつたゆへ幸けふは休日なりおまへやとくさんに麵包の代りに小鳥をとつて上ふと思ふて朝から山へ獵に出ましたがきつう山があれて居つて小鳥もエエとらす遅ふ戻りましたこれかくさまとくさまの叱らつしやらぬよふおまへから詫言して下されや

琴靈夫吾子のけなげな心につけても面目なく泣いて。

琴「凡そ廣い世界にそなたや我程因果なものが世にあらうかいつぞやより爺様にはかの狂心なされてから陶器をもつて晝夜ともにあのごとく奥の一間に引籠りその陶器へ薬をかけてござると思へば又裏へ出て……略……はじめの程はこりや 何ぞ思案のあることと思ふて居たに甲斐ものういよゝ病の業なりと見極はめはきはめたれど今一度とくさまの心をもとの巴律西になされたうへそなたにも良い服着せて學校への人並にそなたを出したの上では私しや死にたい身の願ひじやわいのう

と、互に因果を託ち母子して慰め慰められてゐる所へ、官人薄査、下官の異人八人を伴れて來かゝる、とかく問答の末

薄「イヤ女 身は國王の近臣たる弗列德力薄査と申者なるが今日は來りし事餘の儀にあらぬ御

不審の條々 此家の巴律西事此設困的士はせてすに聞へたる智者にして玻璃の畫を業といたすに此程よりその職業もいたさずして只一間へ引籠り藥種薪木等を買集め晝夜共に焚詰めしこと業體遊興いぶきのこととも覺えず察する所心魂のこらせしは 陰術又は人をねたみし心の害謀成りと隣家の訴へ夫ゆへにこそとくと正しに參りし某

琴靈夫言葉を盡しての申し開き、夫は病體、ことに狂人同様なれば興奮するからと、願つても聞き入れず、薄査たつて入らうとするを、今度は西律子に泣き附かれてとど、いじらしさに折れて見とゞけずに歸ることになる。

二人はほつとして夕飯の仕度に掛るが何も食べる物もない。西律子が木の果、葉花などを摘みに出て行つたあと、飼犬のカメが走り出て来る。琴靈夫ためらつてゐたが遂にカメを殺す。

琴「是ぞ夫や我子の食事チエ、忝ないと西律子入り來つて

西「ヤアコリヤ是カメが 琴「コレ

で幕。さて立志編の方を見ると、實はこの物語は立志編の第三篇になつてゐて表題の卷二とは符合しない事になる。がこの第三篇が立志篇の冊數で言ふと第二冊になつてゐるからそんなことで表題に卷

之貳としたものらしい、なほこの劇の次に紹介しようと思ふ同じ醜案劇西國立志編卷之十鞋補童教學も立志編の第十二編のうちに入れられてゐるのであるが、冊数が第十冊目であるのと同じだらう。

西國立志篇、三篇三 陶工ノ傳

(二) 培那德巴律西ノ事

巴律西ハ、一千五百年永正七年法國ニ生ル、ソノ父母甚ダ貧カリシ故ニ、郷校ズケールノ教ヲ受ケタルコトナシ、設因セイインテスの士ニ住シ玻璃ニ畫クコトヲ業トナシ、マタ地ヲ測量スルコトヲ以テ過活スベハヒヲ爲ケレバ妻子アリテヨリ後コレ等ニテハ口ヲ糊スルニ足ラザリケリ、コノ時法國ノ磁器粗惡ニシテ栗色ナリケレバ巴律西因テ上好ノ陶器ヲ造リ出サント思ヒ立チシガ、一日意イイタリイ太利ノ名工塚刺デラノ製スル美麗ナル磁器ヲ觀シカバ、心益々コレニ傾キタリ、モシ巴律西ニシテ單獨ナラシメバ、必ラズ以太利ニ旅行シ、ソノ秘傳ヲ探ルベキニ、妻子ニ羈ホクダセラレタル身ナレバ、ソノ事モナシガタク、暗中ニ模索シ、懸空ニ思想シテ、五色ヲ燒傳ル藥並ビニ白色ヲ發スル藥ヲ看出シテ、精好ノ陶器ヲ作ルベシト日夜コノ事ヲ務メタリケル、

巴律西己ノ意ヲ以テ藥材ヲ聚メ、碎キテ粉末トナシ、又土器ヲ買ヒ藥ヲ塗テ、爐ノ中ニ燒キケルガ、ソノ經ゴロモアカラ試中ゴロモアカラハ徒ラニ薪柴、藥物、時日、工夫ヲ費スノミナリシナリ、然レドモ巴律西ハコノ秘密ヲ看出サザル中ハ、決シテ中止セズト志ヲ定メタリ、始メテ作レル竈ハ善カラザリケレバ又改メテ戶外ニ作り、コノ竈ニ於テ幾度トナク許多ノ薪ヲ燒キ許多ノ土器ヲ費シテ、貧困ニ迫リ妻子ヲ養フ事モ得ザルニ至リコレニ由テ時ニ玻璃ニ畫キ、土地ヲ測量シ、金錢ヲ得タリシガ忽ニ又コレヲ經驗ニ費シ盡ス、カクノゴトキコト屢々ニナリケリ、ソノ後薪柴ノ價貴クシテ、己ノ家ニテハコレヲ買フ事能ハザリケレバ或ハ近所ノ燒附室ニ於テ、或ハ玻璃室ニ於テ、多年ノ間屢々試験ヲ爲シタリシガ更ニ尺寸ノ功モ見ヘザリケリ

さて貧困を表はす爲に藥種屋を出して來たのは當然であるけれども、後段の薄查はうちや(この名は同第三篇の(三)で述べられてゐる同じ陶工の苦心談の主人公の名である。そして單に名を借りて來たにすぎ

ない者で、その物語の薄査とは全然何等の關係もない人物として扱はれてゐる（がお上の御不審で取調べに来るのは、作者の思ひ付としては一寸變であるが、是も立志傳の同篇（二）の終りで巴律西が發明に成功しての後日譚中に

巴律西既ニ名工ト稱セラルル後ニ甚シキ災厄ヲ受ケタリ……略……巴律西ハ新プロテスタント教ヲ信ズルノ人ニシテ且ツ公然トシテ巴ノ親ヲ主張セルガ故ニ生平巴律西ヲ惡ミシモノニ訴ヘラレテ遂ニ牢獄ニ下サレ、禁殺セララルベキニ定リシガ故アリテ赦サレタリ、ソノ後陶器ヲ製スル法ヲ世人ニ示サンガ爲ニ、種々ノ書ヲ著ハン、又星トノ術ヲ駁シ丹竈ノ法ヲ排斥シ妖術及ビ假附ニセモノノ事ヲ駁リケレバ仇敵益々多ク生シ再ビ異端ノ名ヲ得テバスタイルノ獄トラハニ囚ル。

こんなことに暗示を得たものではあるまいか。

第二幕

巴律西が住家、奥の間の體である。思ひ屈した巴律西が

巴「アア意太利の國より渡りたるアノ陶器を見てよりも此國にてはなせに此色出ぬものぞこれこそ國の恥辱ならんと心盡せし甲斐はなく闇夜に物を尋ねる道理アア長の年月此心苦……略……アアイヤ／＼思ふまい／＼近いためしは古の蒼アサけつと言へるもの鳥の足形にて文字をあみ出せしと聞きたとハ かつして死すればとて斯まで思ひ立たること百萬年かくればとて仕出さいでならうか

これへ琴靈夫先きの喰物をへギの上へ置せて西律子を連れて出て来る。

琴「さあこちの人食事上つて下さんせ 遅ふ成りましてさぞ空腹でござり升ふ早うたべて下さりませ

淨「いへどこなたはいつしんふらん藥種のしほふいとまなく脇目ふらねば琴靈夫なをもそばへすり寄つて

とど巴律西氣附いて

巴「あくまた耳のはたでかしましたいエエ仕事の邪魔になるわ喰物はほしうない邪魔いたさすと次へ立て立て

で琴靈夫この頃の夫の狂態を咎め、貧苦を告げて泣き口説く

巴「エ、又よくもく聞とふもないそのくり事こりやよく承れ此巴律西はナ榮耀遊興で此やふな妻や悴に貧苦な思ひをさして…略…せめてこの色出さんものと或は藥或は燒附晝夜の心苦も國の面目すえくにては妻子にも今のうきめをのがれさし昔語りを樂しみと心のこせし巴律西が心も知らず狂心などはあまりの法外またそのよふに不吉な泣顔大切なる仕事の邪魔 西律子連れて次へ立て、

とど言ひ合つたあげく巴律西、妻を打たんとする、西律子その手にすがりて詫びるなど、

琴「さ、それ程我子が可愛くば思ひ直して職業なし妻子の心を休めてたべ

巴「エ、いつかなこと妻子を見かへて思ひ立つたる此身の望みたとへ百萬年かゝつてなりとも仕出さいで置うものか馬鹿なこと 琴「エ、そんなら二人を見殺しても 巴「知れた事じや 琴「あの二人を

琴靈夫、死んで諫めるより他にないと覺悟して

琴「サア書いて下さんせ 巴「何という 琴「ハイ去り狀を去り狀を書けと迫られてとゞ書いて與へる

巴「遂なつて言へば是非もなししかし乍ら西律子は足手まとひ忤もいつ所につれて行けこれから西律子が活躍して觀客の涙をしぼる場面である。

西「いや〜と〜さまのいはつしやる事ながら男の子は爺ぢやうに付のが世間のたい法じやたとへ此場で死するともわたしや父様の側にゐるわいのう
去り狀もらつて

琴靈夫「エ、是で心がさつぱりと仕ましたわいなあ、これからは行末長う二人で回向を イヤサわたしや榮耀を仕升わいなあ、さらばござんす

と行かうとするのを西律子がつて

西「あれか、さまどこへ行かつしやる　と、さまとめて下されいのう

巴「エ、未練者が男の子は爺ぢやうに付くがたい法と勝氣な詞に似ちもやらす母を慕ふ不所存者が
と又琴靈夫に向つて

巴「うぬはきり／＼出てうせう

琴靈夫すご／＼去らうとする　西律子はすがりついて止める、振り拂つて行かうとする拍子に西律
子椅子に腹を打つて悶絶する

琴「モシ西律子が　巴「ナ、何と

と思はず二人が吾兒を中心にする

巴「エ、是を思へば世の諺にも言ふごとく子は三界の首かせじやナア

琴「モシ

と、琴靈夫が西律子を付きつけるのを振りはらつて巴律西は裏の竈へ行く

第二幕は月並ではあるが作者の構想である。第一幕の終りで引用した立志篇の意を布衍して、夫婦
別れ子別れを見せ劇的效果を治めようとしたものである。

第三幕 巴律西が住家裏手

薄査の部下の官人等が内の様子を窺つて居る。互に琴靈夫の離別のこと、巴律西の狂態など話し合ふ。薄査出で来る。

薄「内の様子は見とゞけ置しが 下官「仰せのごとく色々と手わけなして窺ふところ合點の行かぬは巴律西が胸中 今また妻も離別なし竈のもとにていつしんふらんに火を焚詰しは怪しき事 薄「いかさま夫ゆへにこそ晝夜のおんみつなをもこれより心の付よ

下官去つて薄査一人となる懐中時計を出して見るこなしなどある。ところへ上手より西律子、下手より琴靈夫同じ想ひに出で來つて中央にてバツタリ逢ふ

西「ヤア母さまか

琴「ム、西律子か どうしてこゝへ

と互に語り合ふ中へずつと薄査が割つて入るので

琴「ヤア怪しき男の子

西「アレイ

と飛び退き三人キツとなる。

第四幕 巴律西住家裏手竈の場

巴律西イスに寄つて火を焚きつめてゐる。

巴「我此心に傾けてよりも早年月重りしが今に藥の焼きつかざるはよく／＼造物者にも見放されしか但しは心の愚鈍なるかチエ、口おしい 淨「齒がみをならしこぶしをにぎりくやし涙にとまうつる

焚火の衰へしに氣付き竈の中の器をとり出して見るがまだ焼き附かぬ。

巴「エ、これはや焚物に盡きたるか 今すこし焚きつめなばこの年月心をくだきし事乍らたとへ藥は焼きつかずとも薪盡くれば水の泡エ、コレ何ぞなきや

淨「とあたりを見まはせば かたへに在り合ふ茶碗の棚是幸とひつばづし斧をもつて手頃に割り竈の下へどさし付ればまたも燃え立つ煙より胸の燃え立つ妻と子が

食事をさうげて垣の側へ寄つて來る。二人が垣越しに口説くのも耳に入らず、再び裏へ行く竈の下に、巴律西は狂亂の感である。

淨「まなこ血ばしり見まはせどもそのかひあらぬに力なく小兒がもちし食事のへぎにきつと目を
つけ

巴「ム、これ幸ひ、これ西律子、そのへぎこれへ 淨「いふによるこぶ西律子

西「アイ と靈琴夫のそばへ寄つて

西「コレかゝさま悦ばつしやれとゝさまが食事をあがるとおつしやるわいのう …「エ、何と言
やるあのとゝさまが食物を 西「アイナア

と又切戸へ寄つて

西「サアとゝさま早うこゝ明けて下されいのう

巴「イヤ明けるに及ばぬサ、こゝへ

淨「さし出す垣の外よりうけとつて食事にあらぬ薪木の供物でうどをのせしそのまゝに竈の下へ
とさしこめば外面（さとま）にそれと西律子

西「アレとゝさまがあ（あ）のへぎまで竈の下へいれさつしやつたわいのう と琴靈夫これを聞いてび
つくりして

琴「エ、そんならあのへぎ迄

淨「外圍にうろく妻と子が 琴「エ、今の今までもしもやと思ふていたのがわたしの不覺もう
このうへはおくそうじや

淨「いふより早く乳の下へぐつと突込みその
儘にウンとばかりに倒れ伏す

西律子取り付き口説き 又うろたへ乍ら父を呼ぶ

巴「ナ、何と

巴律西びつくりして切戸を破つて出るところへ以
前の捕手がバラ／＼と現はれる。問答の未立廻り
となつて右左に下官等を投げとばすことよろしく
あつて、ふと又竈の下の衰へたのに氣つき、イヌ
を割つてさしくべなどする、やがて琴靈夫面を上
げて息も絶へ／＼に夫を諫める、隙を窺つて下人
等又組みつくを左右に投げる、このとき竈の下バ
ツと燃え上つて煙がむら／＼と上る、同時に薄查
入り来る 皆々煙を見て

薄「今此竈のうちより青^せキの煙立ち上るは

明治の初期に於ける織案劇二つ



巴「さては目ごろ心をこらせしこと造物者にもまもらせ給ふか 琴「わたしの消を行くほのふの

煙か 薄「但し陶器の焼きつきしか 巴「根無し事とはいひら乍 琴「どう物加護のしるしなる

薄「何にもせよソレ 巴律西どの 巴「ハア

淨「組みつく下官をつき退けなげ退け なんとなく竈のふたおしあけ取り上げ見ればこはいかに今
ぞあらはすせいしつゝの美しいの色に巴律西 これはとばかりものも言はずしばあきれて詞なし
やがてうれしきしこなしにて妻のもとへ寄つて

巴「ヤア〜女房悦べ今ぞ此身の本望達したり

と喜ぶ妻子、感じ入る薄査、巴律西の「そもこの陶器の製法は」などと述懐あつて

巴「それに引かへ只悲しきは妻琴靈夫我をいさめんその爲に

と悲喜交々である。互に來世を誓つて琴靈夫は息を引とる、巴律西は薄査のすゝめで西律子を連れて
都、巴理西^{バリシ}へ出世の門出にて大結めである。

立志篇に

巴律西一ノ大試験チナサント思ヒ三百餘ノ土器ヲ買ヒ藥料ヲ塗り玻璃器ニ入レテコレヲ燒クコト四時バカリニシテ出シ見レバ三
百ノ中ニテ藥ノ燒キツキタルモノ一箇アリ熱サ退キ硬ナルニ及ンテ次第ニ白色トナリタリケリ抑モコレマデ他色ノ燒ツキタルモ
ノアリケルガ白色ハコノ時始メテノコトナレバ巴律西大ニ喜ビ歸リテコレヲ妻ニ示シケル、然レドモコレ特ニソノ端緒ノ徴ク
ス

露ルルノミニシテコレヨリ後ソノ試験亦屢々功ナカリケリ

…中略…一晝夜ノ間電邊ニ座シテ薪柴ヲ加ヘタリシガ藥料未ダ燒ツカズシテ旭日ノ光ソノ額ヲ照スニ至レリ時ニソノ妻少シ許ノ朝食ヲ持チ來リ、巴律西ニ與ヘケリコレソノ暫時モ電ヲ離レズシテ看候スルガ故ナリ第二日過ギタレドモ未ダ燒附カズシテ夕日西ニ沈ミソノ夜モマタ空シク過ギヌ巴律西葦垣面ソノ色土ノゴトク身體枯瘦シタレドモコレヲ事トモセズ竊傍ニアリテ看守シテ去ラザリケリ第三日晝夜又過ギテ第四日第五日第六日ト相續キ第七日ノ曉ニ至ルマテ薪ヲ加ヘケルガ藥料終ニ燒附カザリケリ…略…新試験ノ具備ハリケレバヤガテ火ヲ焚キハジメタリ熱氣盛ニナリタレドモ藥料未ダ燒キツカズシテ薪炭已ニ乏シクナリニケリ、イカニシテ火力ヲ減セザラシメント思フニ固ニ木牆ノアリケレバコレヲ引キ抜キテ火中ニ投セシガ藥料未ダ銷セザリケリ、巴律西ナホ十ミエトノ間火力ヲ蒸ハナバ經驗成ルベクヤト思ヒケレバ、何ホド貴キノナリトモ薪ニ用ヒナント遂ニ家ニアルトコロノ椅子ヲ壞リコレヲ火中ニ投ジタリ然レドモ火候ナホ未ダ到ラズ殘レルモノハ度架ノミナリケルガコレマヌ裂テ電底ニ抛タリソノ妻子ハ巴律西狂病ヲ發シタリト號ビ逃ゲ走リシガゴノ最後ノ火力ニ由テ藥料始テ燒附キタリ尋常ノ粟色瓶瓶ナリシガ電ヨリ出シテ冷カナルニ及ビ變ジテ白色トナリテ光澤ヲ發セリ是ソノ經驗ノ始テ成就セルモノナリ

かうして立志篇と對照して見ると原作の人物、主人公の性格、氣持など非常に忠實に劇化し、それに妻子を點出して劇的效果を收めようとしてゐる。この作が當時相當行はれた爲めに次に紹介しようとする鞋補童教學も續けて出版されることになつたものであらう。

二、西國立志編 鞋補童教學 明治六年 二月開版

前號に紹介した。其紛色陶器交易、が出て一ヶ月の後に出版されたものである。同じく西國立志編と銘をうつてゐる如く先きのもの同様に題材を立志編から採つてゐるが、そのとり方は其紛色陶器交

易程ではなく單に劇中の人物の名前と主人である邦治パウシエが靴直しをし乍ら里童に學問を教へてゐたといふことを骨子とした丈である。書籍の體裁は全然さきに紹介したものと同じで、なほこれに引續いて逐次こんな風のもので出されたこと、或は出される計畫のあつたことは、卷末の廣告に、頃彌生コトミヤ花盛櫻田さいたくらた、又は八坂祭禮やまやのにぎまつ夜宮賑よみやにぎまつなどと出てゐることですらされる。しかし自分も氣をつけてゐるが一向に聞いたことも見たこともないから、或は計畫丈に終つたものかとも思ふ。がこれらの異國味を含んだ、勿論今から言へば、實に皮相極はまるもので異國味なども言へない位であるが、それは時代である。例へば今盛んに有難がられてゐる所謂モゲン喚などもそんなものであつたと言ふ時代が來ないとは言へない。それで、この單に服装や、住居の様子や、人名若しくはトケイ、ターフル、ペン、などといふ器物の名などたゞそれ丈をとりこんだかうした物が、或一時期にそれはほんの短い期間だけだつたらうが、相當行はれたのちがひない、この書籍や或は先號に紹介したものはどんな風なうれ行きだつたかそれはわからないけれども、表紙裏の廣告、即ちこの芝居の役割りを書いたものゝ上に

口 上

大入附場棧敷賣切申候

各々様

勘 定 場

とある事でも察せられる。元來先月號に紹介したのも、これも、かうした戯曲が出てから上演されたものではない。

上演せられてからこれを出版して公にしたのである。

先づ要點をひろひ乍ら大略を紹介して行つて見よう。

序言に

書賈需に辭みかたく否なといふのは戯曲の物體。實は開化の人間似しつゝ需めらるを得手に帆と蒸氣の船に乗が氣で丸い五大州の萬國繪圖を走り廻りし端書も。まはらぬ筆に評の淵礎おろしてとやかくと趣向も古き舊時代の俗話に謳う其中に花の都は歌で和ぐと歌人ならて學者の邦治パウルス三十一文字の年頃も書物の程は修業者革斯里ガルスリ未だ五文字七文字十歳に足らぬ小兒さへ五言七言幼戯なく手に葉の合はぬ丹精は實にも邦治が教學一席譚はなし

明治六年二月
西曆一八七三年

第一場

造り物平舞臺にして真中に九尺の家體、西洋壁同じく異風なる屋根つけ、上下共袖山をなしかけいつもの所に異風なる門口、下の方に寒紅梅盛りある、惣じて皆雪持の書割、幕のうちより秣馬トイマ

明治の初期に於ける繚案劇二つ

士菜スライ的貧家の異人拵にてイスに懸り前に焚火をたき、兩人共書物を讀みてゐる體、雪風一淨瑠璃にて幕ひらく

淨「小節張るものは榮名をなすことなく、すこしき恥をかくむ者は大功を立つることあたはず、おのれが人に及ばざるを恨らみず人のおのれにすぐるをねたむは是小人のならひとていぬを屠りし樊噲が刀は楚兵七十萬の鋒先をくじきひやうぼが恵みし韓信がかれいひ粕は漢象四百年の民を賑はず、下百姓の心をやぶらさるは、王者の道とかや、ためしをこゝに英國の波都毛士ホイズの山路なる風の行方ぞさだめなき ト此淨るりしらせにて前なる淺黃幕切つておとす、鶯笛、兩人とも空を見て思入ある。小たまいりの相方雪おろし、秣馬士トイマス思入あつて

秣「きのふの荅は今日の花、明日はちり行く庭の梅ケ枝 これ人間の身もまづそのごとく、いまだ老先きあるとは言へどかゝる山路のこのすまひ、何とてその身のたのしみは 降りつむ雪とこの寒梅 ト是にて菜ライト的も本をやめて思入あつて

菜「價つきせぬ銀世界 四季折々の樂しみには詩歌につくらんこの身の苦行 秣「花を盡せしアノ小鳥、時得し時にはその聲發すという 菜「花もの言はねど時じかう教へしあの花鳥 秣「はて風雅なる詠しやじやなあ 淨「實にも貧家の一得は花鳥愛せし山／＼の雪によねんぞなかりける

菜「いかにこの國のならひとて、ひんかに育ちしもの共は、これぞと學ぶ方なくあだに時月ををくりしのみ トほろりとするを秬馬士 思入あつて

秬「イヤノ、さにあらず、ふもとにござる邦治師ガシネは補鞋工業ヒョウケンのその方が貧家の者へアノ教學

菜「父母にまさりし御恩のかづ〜 秬「世のことわざにも申するごとく造物いかで人を害せん

や 菜「長者が學ぶ萬葉よりも 秬「學ぶ貧家の 二人「われ〜が 淨「はるかにまさる

師の恩と浮世觀せし兄弟がひたんのなみだにくれ合の、吹雪につれていで来る諸國をめくる修業者は月雪花のたのしみに、世にかぎりなく詩歌の道 雪の山路にさしかくる、ト此淨るりにて本舞臺の兩人又書物をよみかゝる、是にて雪おろしはげしく、修業者革斯里ガイスリ やはり旅かけの外國人こしらへにて、花道より出てよき所にて立どまり 思入あり 小たま入りの相方になり

革「降つたるかな〜木々に降りつむしら雪の花のがめにおもはずも深入りなせし此山中 日もはや西にかたむきて ふもとの道もそれども かつてしれざるこの山路 ト本舞臺の焚火を見

て 革「おゝ幸ひアレ成る向ふの焚火 あれへ便つて一宿乞はん おゝそうじや〜 淨「そうじや〜と修業者は山また山をうちめぐり庵のもとへさしかゝり ト此淨るりにて革斯里本舞臺へ來て

庵の門にて

革「チトもの申さん 雪の山路にふみまよひ はなはだめいわくの仕もの何卒一夜をお頼み申さん

淨「いふにこなたは表に向ひ ト是にて秣馬士門口へ出て修業者に向ひ

秣「此雪にさぞ難儀にござらう定めし冷えつらんまづノ焚火のもとへ ト是にて革斯里も嬉しきこなしあつて、革「はあそれは千萬忝なうぞんじまする しからは 御亭主ごめん下され 淨「式禮し、雪うちはらひ修業じやは焚火のもとへ座につけば ト後始終小玉入りの相方 是にて革斯里の下の方の空きたるイスへ腰をかける 菜的も此時書物を讀まして、革斯里に向ひ思入あつて

菜「かゝる山中なれば何も珍珠はござらねど馳走がはりのこの焚火、せめては雪のはるゝまでマアノゆつくりととうりうのなさるがよござる、革「ハあ、有難きそのおことば イヤも修行いたす身の上は野に伏し山のすまひといへ共、かゝる大雪にてはからず御宿のご無心申しありがたふ存じまする 淨「禮儀をのぶるこなたにはまたもとり出す讀さしの書物によねんなかりける 革斯里元より修業の身二人がありさまをとつくと見て ト淨るり秣馬士、菜的、又書物をよみかける 革斯里もとよりすきの道ゆへ是を見て思入あつて 革「はてうらやましき御兩所のありさまスリや御貴

殿方にもその道を御まなびなされてござるよな 淨「うらやましげなる言葉つき秣馬士旅人にうち向ひ ト是にて秣馬士も思入あつて

秣「修業者 御貴殿へ御みせ申もめんぼくなき賤がたのしみイヤモ學師とてもござらねば只書林の古しへものを買求めほんのこれが退屈やすめ、又は眼の養ひとやらでござるハ、ト是にて革斯里もこなしあつて

革「イヤくさにあらず それがしとてもこの道をしうしんに存じ諸國を修業の身にござれば、一樹のやどりも縁あればこそ 何卒それなる書物拜見のいたしたうぞんする

秣「サアく御えんりよなく ほんの小兒のわざくれ書物サア御らんなされい ト是にてガスリに渡す、受取り乍ら 革「これは忝なう存する 淨「いひつゝ手にとりくりひろげつくづく詠めどその文字、一字一點もよめぬこなししかくあつて

革「ヤ、コリヤどうじや 淨「面目なげにくりかへし〜革斯里もせきめんし 見る程よめぬ字にさすがの革斯里もせきめんし イスを離れてさんばいし ト此淨るりにてガスリはイスをはなれ平伏して二人に向ひめんぼくなき思入あつて

革「ハア面目もなき拙者がありさま我高慢の心より 諸國字學の修業に出でしに今日 はからず

この所にてかゝる御兩所にお合ひ申は我が高まんの氣をひしぎ給はん造物のはからひ今よりあとはいし師とたのみ尊敬つかまつらん 何とぞ此より門弟となし下さり升うならば有難うぞんじ升る

淨「ていとう平しんかぎりなく うへまひゐるこそ道理なり秬馬士菜のはうちばらひ ト是にて兩人こなしあつて

秬「是は旅人には御座興にもことに依ると申すもの かゝる植生にすまひなすわれくふせいのみ樂しみこと何ぞ都人がさやうなこと 菜「いかに旅中のうさとは言へど さやうにたはむれなくマアく是なる焚火のもとへ ト是にて革斯里猶々平伏して兩人にむかひこなしあつて

革「いやくなくたはむれざきやうにあらず、我此所にとまつて晝は焚火の枯木を集めまたは御兩人の食事のかすくも仕りその手すきには、何卒お教へ下さりませうならば、ありがたうぞんじまする ト是にて思入あつて一寸すゝみ出て、

革「近頃ぶしつけがましき事ながら夫れなる書物學ばぬうちには、いつかな此家を立去り申さぬト是にてきつとなる。

淨「思ひ詰たるいつしんに或は頼みひれ伏して なみだながらに願入る こなたは何といひ甲斐もはやつげわたる入相のかねぞ身にしむ雪風に、ふたりは空をうちながめ ト是にて淨るりのうち

に時の鐘鳴る 此時秬馬士 菜的の兩人はイスを離れて門口へ出て空を見て

秬「おゝもはや入相と相見ゆる さあ弟仕度のいたしませう 菜「いかさま様にござります、

幸ひ今日は門に盛りしアレなる寒紅梅師匠へのお土産にいたしませう 秬「おゝそれぞよく心がつきました。サ、早う〜 淨「師を重んぜし兄弟おとこは梅の古木の元により それかこれかと枝ぶりを

盛り乍らの一枝を手折り、二人は門の口 ト此淨るりのうちに秬馬士、菜的、門口へ出て菜的門口の梅の枝を折ることあつて秬馬士、革斯里に向ひこなしあつて、秬「イヤ何そこな旅人 われ〜はチト叶はぬ用事あつて麓まで參らねばならぬ程にそれにてゆつくり留主 せひ〜おたのみもふす、ト是を聞いて 革斯里こなしあつて

革「何と御意なさるゝ スリヤお二人ともにあのふもと迄お越しとな 菜「すぐさま戻るほどに夫れに御座る焚木を焚き、しばらく留主をおまかし申す ト是にて革斯里合點の行かぬこなしあつて 革「さやうならばお早うお歸り下され、それ迄はよめぬ乍らもこの書物 おかり申して學び升る ト是にて兩人に門口をはなれてこなしあつて 秬「しからば後を 二人「おたのみ申す 二人は梅の枝を持つて去る。後には革斯里が、どうしても合點が行かぬ。

革「今他行せし兩人は賤しき者とあなどつて いまのせきめん、いかなる者の落人なるや それ

に引かへ詞のはしには師匠へ土産と梅の一枝、またあの上に立つ人とは正しく造物の再來ならん
何にもせよ後追かけてことの様子をソレ

不審のあまり遂に二人の後を追ひかゝるが、知らぬ道とてはたと當惑する。ふと足もとの雪にしるさ
れた二人の足跡に氣づき、それをたよりに二人の後慕つて行く、道具廻る。

第二場

造り物平ひらにして舞臺一面寒竹の植込み 真中に大なる石塔上下ともにいろ／＼なる石塔ありよ
き程に草屋根井筒の井戸あり、日覆より松の釣枝やはり雪もちの書割、すべて英國墓所の體、本
釣鐘雪おろし淨るりにて此道具納る。

淨「追て行あとしらませてふる雪に麓もうづむ山路をいとはぬ娘はなき母へ手向の花ぞたすさへ
てしほ／＼として出きたる ト此淨るりにて邦治ハジメの娘李夫リイフやはり英國の娘の拵にて手桶に櫛やうの
花の枝を入れ 花道より出て花道よき 所に立止つて思入あつて

李「母さまお果てなされてより此所へ御墓をたて日毎の花をさ／＼げしも亡き母様へ逢ふ心持こよ
ひは雪に往來の人ぞなさをさいはいに 母へ手向けし回向なりともそうじや／＼ト是より本釣鐘し
んみりとした獨吟の唄になり 此時李夫こなしあつて本舞臺へ來て井戸より水を汲み上げ真中の塔

へ水をそなへることよろしくある。此時上の方より墓守の溪蘭カイラン出てうかがふている。此時娘李夫石塔の前へすはり合掌するをうしろより溪蘭出て李夫をかへて

溪「さあ／＼しめたぞ／＼ ト是にて李夫びつくりして

李「アレイ トふるふてゐるを溪蘭思入あつて

溪「あゝこれ何もそのようにふるふことはない。コレお娘わしじや身ともじや私わたしじや それ墓守の溪蘭じや ト思入あつて 李夫へしなだれかゝる 相方になり。溪蘭李夫のそばへいやらしう、しなだれかゝる李夫にげようとしてゐる カイラン思入あつて 溪「コレお娘や そもじがちかい頃より毎日／＼此の墓所へ參詣におじやるやうになつてからといふものは、寝てもさめてもそもじの顔が、朝夕にちらついてそれはそれはこの石塔迄がそなたの顔に見えまする ほんにやれやれどうしたらよいだらうと思ふ所へ此參詣 けふはたまらずこの戀慕 アノこゝな命とりめが トもたれかゝる 李夫たゞふるい乍らにかぶりをふつてゐるゆへカイラン思入あつて

溪「コレどふしたもののじや 壬生狂言の桶取りのやうに、ものもいはずかぶりふるとはどうよくな あんまりむごいコレおむす どうも息がはづみさうな ちよつとこゝでツイちよこゝ

とこれで第一冊は終つて第二冊に入る。

トカイラン李夫にだきつかうとする。双方こなしあつて

李「エ、あだめつそうな 御はかを守る人とも覺えず。みだらなことをさしやんすないのう
こりやもうこゝには トにげかける事ある。

淨「逃げ行くもすそを引つかみ 溪「エ、手ぬるういへば付上るしぶとい女郎め 今見入れたう
へからは、いやでも應でも抱いて寝るのだ こりやお娘こゝをよう合點せよ どうで一度は渡る河
とくしんして抱れて寝い 李「エ、あだだけがらはしい いやじやくくわいのう 溪「ム、いや
とぬかしやア生けてはおかぬ さあこれでもいやか抱かれて寝るか 淨「けんおつとつて 溪蘭は
目さきへずつと突つけたり、ト李夫これを見てびつくりして

李「アレイ ト逃かゝるを

溪「こりやくくびつくりするな まだ殺しはせぬわい、やいさあめらう どうだ ウンと言ふ氣
か但しはいやか コオ これを見よ 無銘でもバクヤのつるぎウンとさへいや 一夜でもまくらか
はして俺が女房、いやならすぐに即席せごん南無といふ氣かなびく氣か……………

と、はねつけられて、例に依つての手詰の強談判である 娘は力も盡きて手を合せて拜む

李「助けて赦してたもいのう

溪「エ、そうぬかしやもうこれ迄

逃れんとする李夫 切らうとする溪蘭、とゞ立まはりの末 あはや、といふ所へ

淨「雪に付たる足跡をしたひしたひて以前の修業者 ト革斯里があらはれる、よろしく型のごとくに娘は助けられ、溪蘭は革斯里の爲に倒されてしまふ 道具廻る。

第三場

造り物平舞臺にして西洋襖一面に立切り上よりランプ三つ程釣り真中に邦治グッスに懸り、其前にタアフルを置き鞋をつくらひ乍ら皆々へ教學してゐる。右邦治の左右に返し前の秣馬士、菜的、イスにかゝりゐる 上下のイスに隣家の小兒八九人程書物を讀んでゐる。總て鞋補邦治住居スベイの體やはり雪おろし置淨るりにて此道具納る。

淨「さして行くは所も名にし負ふ被都毛士ゴイモックスのふもとなる片山さとの埴生住み まれにこと問ふ猪猿シのわびて友とや慣れぬらん さればこゝに補鞋コツエくぎやうの片手には貧兒をあつめ 學校の老人七つ八つの愛ざかり まなぶほつせいさながらにながれもひゞき谷川の一雅の水ぞくみぬらん

本篇の主人公たる邦治の住居である。菜的が先きに折つて來た梅の花を師の邦治の前へさし出すことなどあつて、邦治は鞋を補し乍ら集つてゐる貧家の子供達に寺小屋師匠、秣馬士兄弟もその側で學問

に餘念がない。

そこへ李夫が、革斯里に送られて歸つて来る。

李「とくさま只今立かへりましてござりまする

と次いで秣馬士、菜的、にも挨拶ある

那「こりやくあれなる旅人は何人なるぞ

で李夫が

李「ハハ此おかたこそは私しが爲には命の親、わけはもし爺さま皆様お聞なされて下されませ、とさまの顛末を詳しく語る。親の喜び、客人への禮言、革斯里はそのまゝこゝを立去らうとする。とゞめる親娘、とゞ菜的も止めに出て来て顔を見合はせる。二人とも愕くこなし、革斯里は此場の様子にそれと察して邦治に弟子入りを懇願する。邦治は頑として許さない。娘も共に口添へして、叱らるゝなどあつて、今度は革斯里到底駄目と見てとつて、しばらくの逗留を頼む、娘の恩人でもあり、邦治喜んで承諾する。

怠くんだらうと邦治がさし出した小本を革斯里が開いて讀まうとすると一字も讀めないの、又々驚入る。やがて革斯里は奥へ招せられて、兄弟も一緒に入つて、舞臺には子供と邦治のみ、

淨「さとのわらべもおとなしく、またも書物を學びける。折からこゝへ出来るは王の使者たる禮斯レイズ公。下官あまたを従へて邦治が宿へさしかゝる。

下官の案内などあつて李夫の應待、

下官「都よりお使者なるぞ。淨「案内に邦治うちおどろき。邦「都よりのお使者とな
で禮斯正座へ著く。

邦「いかなればこそこの貧家へ。何ゆへあつてこのお成り

禮「上使に立ちしことよの儀にあらず、此波都毛士の住人こぶらい工業の邦治事。學士のきこえ
そのみならず付けとゞけなき貧兒迄。その業職をうち捨て、教へし段々早都へ叡聞に達したり

まつた同じく下賤の者にて秬馬士、菜的の兩人こそ邦治に劣らぬ天晴なる學士の聞え、急ぎ都へ迎
へ來れと上意をうけし此禮斯只。武烈顛ブライケンの海岸へ著船なし明朝とは存せしかど。大切なる御用にま
かせ。夜中ながらもすいさんせし。上使のおもむきおうけ申してよからう。

淨「思ひがけなき上使の言葉、親子は顔を見合せ。しばし言葉もなかりける、そばに聞ゐる小兒
ども皆々顔をぞ見合してちからなきげにひかへゐる。邦治やうくひぎをすしめ、

邦「ハア。上使のおもむき、何とていはい申さんや。さりながら幸奥には秬馬士菜的の兩人も參

青乎者置而曾嘆久

のやうに色の對は例が無いではないが、憶良のは餘りにも詩文の句が鮮かである。

また詩文の對句には數字の對が屢用ひられてゐる、和歌に於ても日本紀なる蘇我馬子の歌に
豫呂豆餘珥訶句志茂餓茂

知餘珥茂訶句志茂餓茂

とあつて古くから用ひられてゐる。それが詩文と交渉があるか否かはさておいて、數の扱ひには可なり興味を感じてゐたものと見えて六伴駿河麻呂の歌に

一日爾波千重浪敷爾雖念奈何其玉之乎二卷難寸

といふのがある。手にの^〇に辭を數字の二文字で書いたのも意のつての業かもしれぬ。萬葉集卷四に

娘子部四咲澤二生流花勝見都毛不知戀裳摺可聞

一瀬二波千遍障良比逝水之後毛將相今爾不有十方

足引乃山二四居者風流無三吾爲類和射乎害目賜名

二空去月三光二直一目相三師人之夢西所見

とあるなどは、何れも文字用法上に數字を扱つたものである。家持の歌に

一重耳妹之將結帶乎尙三重可結吾身者成

とあるのも數の扱ひに興味を持つた歌であり、この歌の本歌となつたかと考へられる卷十三の

二無戀乎思爲者常帶乎三重可結我身者成

も同斷であらう。が、その中にも最も巧みに詠んでゐるのは、高市連黒人の

妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴

であらう。中には、この歌を引いて萬葉時代に縁語の用法があつた證左としてゐる人もあるが、それは少しく無理なやうである。

然し、私も萬葉集時代に既に縁語の用法は始まつてゐたと考へてゐる一人である。萬葉集卷四

吾妹子爾戀而亂在者久流部寸爾懸而縁與參戀始

戀そめしは染しに通じて、糸の縁語である。同卷十六

安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國

淺心は池の縁語である。かうした例が數々出てゐるのであるが、これらは縁語の用法があつたとすれば、縁語であるが、その用法が發達してゐなかつたとすれば、それまでのことで、それらが縁語として用ひられたものかどうかは、別に證跡を得て後に定まる問題であるけれども、この事實を證明する

と互に別の言葉、邦治くれくれも子供のを革斯里に頼むことなどある。

革「せめては此小兒ら、まつたそれがしへの名残には何ぞかたみを

「浄」願へば邦治もとやかくとあたり見まはしかたへなる年ふるすぎし古木の立木 これさいはひ

と立寄つてペンとりいだし こぼくに向つてさら／＼と名残の一詩ぞのこしけり

邦「いやなに革斯里殿 くれくれも小兒のことお頼み申す、まつた、こなた様にて師弟と名乗り

し申斐もなく すぐに別るゝこの邦治 かならず恨み思はれな 今此邦治がかたみの印 ト邦治思

入あつて革斯里に言ふ、革斯里古木のもとへ立寄つて讀むことあり

革「只願汝勤學揚名五大州ただれがふんぎやくまつとめなをこたいうにむひよ

名残は何時盡きさうにも見えないが、禮斯に急がれて各々船に移る。猶船のうちと岸邊とで別れを惜しむ様子それ／＼あつて、

わかれをつけて出世の出舟 王の都へ出で、行く

幕

さて今度は立志編の方の本文を見ることにする。

先號でも述べたことであるが、西國立志編卷の十とはあるけれども、第十二編、儀範又曰典型ヲ論

ズといふ中の物語である。冊數の第十冊に當るのを取つたものであらう。

西國立志編 第十二編

九、邦治鞋ヲ補ヒ家業ヲ做ナガラニ修金ナキ貧兒ヲ教ヘシ事

韋斯里曰ク吾ガ義學ヲ世ニ興サント志シ、コノ事ヲ以テ吾任トセシハ極テ些微ノ事ヨリ激發セラレタリ、人ノ身世ハ、川流ノ如ク、始メヨリソノ趣トコロヲ期セザレドモ、自ラソノ往クトコロノ路ヲ覓メ得ル事蓋シ天命ノ然ラシムル所ナリ、予多年前ニ上帝道學士查爾馬斯ノ桑梓ナルフチアスノ海口ニ遊ビシ時、一ノ旅館ニ入り飲食ヲ取りシニ、其房中ヲ見ルニ、女伴羊ヲ牧スル圖アリ、コレハ吾心ニ中ルホドニモ非ズ。然ルニソノ火爐ノ上ヲ見レバ大イナル印刷畫アリテ、補鞋工房中ノ景ヲ描ガケルモノアリ、コノ補鞋工鼻上ニ眼鏡ヲカケ一ノ舊鞋ヲソノ膝ノ間ニ置ケリ、額廣ク口堅ク高大ノ志氣アル人ト疑ハル數多ノ童子女兒襤褸ノ衣裳ヲ着ケルモノ、コレヲ圍繞シテソノ課業ヲ學ブ、補鞋工ソノ忙ハシキ手工ヲ做シツツコノ貧シキ子女ヲ教ヘ、仁愛ノ道光一室ヲ照耀セリ。予コノ圖ヲ觀テ奇ナル事ニ思ヒ、詳カニコレヲ知ラントソノ題言ヲ讀メバ、コノ人ハ戎・邦治トイヘル波都毛士ノ補鞋工ナリ、貧家ノ子女街衢ニ嬉遊シ、教育ヲ受ケズシテ惡習ヲ長シ廢物トナレドモ、教士コレヲ憐マズ官吏コレヲ察セズ、郷・裕コレヲ救ハザルヲ、邦治獨リ惻然トシテ之ヲ悲シミ、良牧人ノ如クコノ襤褸ナル子女ヲ聚メテコレヲ上帝ノ道ニ導キ、人世ノ學業ヲ教ヘ、毎日工事ヲ勉メ額ヨリ出セル汗ヲ以テ僅カニ口糧ヲ得過活ヲ做ル間ニ修念ナキ子女ヲ教育シ既ニ五百人餘ヲ救ヒ出セリト記シテツアリケル、予コレヲ讀ミ畢リテ後輒然トシテ自ラ恥テ從前ノ行事ヲ默省スルニ、他人ノ爲、一世ノ爲トナレルト幾何アラズ、然ルニコノ人、極卑極賤ノ境界ニ在リナガラカカル仁善ノ大功勞ヲ美シクモ成セルモノカナト、吾心ニ且ツ恥テ且ツ感ツ意ハズ聲ヲ出シテ同伴セル友ニ向ヒコノ人ヲコソ眞正ノ仁者ト名ツクベケレ、不列顛ノ中ニ未曾有ノ大イナル記功碑ヲコノ人ノ爲ニコソ建ツベケレト言ヒケリ、抑モ造化ノ大主、貧シキ子女ノ教育ヲ受ケザルヲ悲ミ玉ヒ。コノ人ノ心ヲ默啓シ、一世ノ倡首ト爲ラシメ玉フニ疑ナシ、戎・邦治ハ、獨リ仁人ノミナラズ、亦々智者ナリ、ソノ貧兒ヲ枯キ教フルニ「ボリスメン巡吏ノ如ク勢ヒヲ以テコレヲ驅追スルニ非ズ。熱キ番著ヲ弊衣ノ間ニ携ヘ、已レガ如キ弊衣ナル子女ノ鼻下ニ番著ヲ近ツケ、カクシテコレヲ家ニ延キタリシトナリ」予思フニ末日審判ノ期至リ善人尊榮ヲ受クベキノ時、コノ塵世ニ於テ、詩人ニ功

明治の初期に於ける續案劇二つ

徳子讀セラレ大石ニ勞績ヲ勒セラルルノ人、及ビ生時權勢爵位アルノ人雲霞ノ如クニ來リ聚レル中ニ於テ、造化ノ大主特ニコソ
 兩陋貧窶ナル考人ヲソノ前ニ召ビ近ヅケラレ、コレニ宜テ汝善事ヲ吾兒子ニ施セリ即チ吾ニ施シニ同ジトテ厚クコレヲ賞シ玉フ
 、キナリ。

かうして對照して見ると先號に紹介した、其紛色陶器交易程に忠實な劇化は行はれてゐない。悪く
 言へば立志編中の革斯里が見たと言ふ印刷畫が第三場の舞臺裝置となつてゐること、邦治の貧家の子
 女を教へた事柄、それ丈がとり入れられてゐる丈である。邦治上帝の招きをうけて子供を他人に托し
 て去るのも、立志篇中の革斯里の稱^たへてゐる邦治の氣もちとはかけ離れたものである。一體この劇を
 讀んで行くと第一場 第二場と 盛り上げて來たものが第三場第四場に至つて全く力が抜けてしまつ
 てゐる。

例へば第一場、第二場であつた經過を経て邦治一家へあらはれて來た革斯里が後に残つて子供達
 を引うける事丈で終らせてしまふ前後の不釣合、母を失くして老いた父の手に育てられた李夫、老師
 の信任も厚い凜々しい若者兄弟。何かしら企圖のあることを第一場第二場で思はせられるのに、第三
 場四場はあつけない。殊に立志編の「不烈顛海岸ノ中ニ未曾有ノ大イナル記功碑ヲ建ツベケレ」など
 が「只風汝勤學揚名五大州」などのかたみの文學にたつたとしたら悪い洒落である。

こゝで劇の批評をする必要もないのだが立志編からの戯案劇であると言ふことの爲に紹介したこと

から立志編との関係を見るのに深入りしてしまつたのである。先にも述べたたゞ異國風をとり入れて見物にうけようとするこゝと、所謂教育物であると言ふことより以上に望むのはこんな過渡期の物に對してはこちらが無理なのである。

(書物禮讚、昭和三年七月、同四年二月號)